杭州・西湖のほとりで目の前が真っ暗になった

やがて日もとっぷりと暮れた頃に、木立の間から、ようやく西湖（シーフー）の湖面が見えてきた。湖岸を散歩する観光客たちのひっそりとした賑わいが少しずつ近づいてくる。重たい荷物が肩に食い込んで、少し痛かった。

杭州駅を出てから、すぐに地図を片手に大声を上げるおばさんから二元の杭州地図を買い、ひたすら西湖を目指して歩き続けたのだった。

目指すホテルは西湖の湖岸にあった。高級ホテルはどこにもあるのだけれども、日本人も泊まれる安いホテルは湖岸近辺に何軒かがあるだけだった。

リキシャ（自転車の後部が二人乗りの客席になっている乗り物）の脇で客持ちをしていた男が声をかけてくる。

「どこへ行くんだ」

「ホテルまで送ってやるよ。ホテル代込みで一〇〇元だ」

目指すホテルが近かったので、僕は男の声を無視して、先を急いだ。早くチェックインして、休みたかった。

やがて旅行案内書に安宿として紹介されている西湖飯店が見えた。ロビーへ入ってカウンターを見ると「満」の札が出してあった。フロントの女性に確かめる。

「房間、没有吗（部屋はないのですか）？」

「没有（メイヨー）」

取り付くしまもなく、フロントの女性はぶっきらぼうに答えたのだった。

仕方なく、ロビーに腰を下ろしてもう一軒の安宿、華僑大楼の場所を地図で捜す。華僑大楼までは一・五キロ程だった。重たい荷物のことを考えるとおっくうだったけれども、いつまでもこうしているわけにはいかないので、西湖沿いの道を歩き始めた。

途中、またリキシャで客待ちをしている男がいたので、華僑大楼を知っているか、と聞くと、もちろん、と答えた。

「多少銭（いくら）？」

「一〇元」

少し考えて男は答えた。

料金のことよりも、疲れていたし、早く休みたかったので、ＯＫし、リキシャに乗った。

一〇分ほどで華僑大楼に到着。入っていくと、小さなカウンターには「満」の札。

「没有…」
と呟きながら、リキシャに戻った。
「どこでもいいから、ホテルへ連れていってくれ」
と告げる。
男は体を軋ませながら、いくつかの飯店や招待所をまわってくれたのだけれども、ことごとくが「満」なのだった。考えてみれば今日は土曜日、しかも中国で有数の観光地なのだ。ホテルや宿がどこも満員なのはむしろ当たり前なのかもしれない。時間ばかりが過ぎて、次第に夜も深まってきて、男も僕も焦り始めた。
最後の手段だと、男は小さな旅社に僕を連れていった。
「寝るだけだ。あまり話をしないで、明日は早く出発しろ」
と言いながら、小道を少し入った所にある旅社に入っていった。宿の主人と交渉している声が聞こえてきた。だが、そこも満員でどうにもならないのだった。
困った様子で、しばらく考えていた。
「西湖から少し離れてもいいか」
「どこでもいい」
ぜいたくは言っていられなかった、ともかく寝る場所があれば。
やがて自動車やタクシーがずらりと並んだ大きなホテルに着いた。男はホテルに入っていき、すぐに肩を落して帰ってきた。
「日本人はダメだ…」
男も知っているホテルを当たり尽くしたようで、当てもなくとにかく繁華街の方へ走っているようだった。もう、なるようになれ、という気持ちでリキシャに揺られていた。
やがて、ある街角にリキシャを止めて、そこにたむろする男たちと話し始めた。しばらく話をしたあと、リキシャに戻ってきて、告げる。かたわらには若い男が立っていた。
「この男があなたにホテルを紹介すると言っている。紹介料は五〇元だ。それでもいいか」
「ＯＫ、ＯＫ」
僕には交渉する余裕はすでになかった。
男にリキシャ代、一〇元を差し出すと、首を振って、二〇元だと言う。もっともな話だ、最初の華僑大楼でカタがつくはずだったのに、こんなにあちこちとまわったのだから。
若い男は大通りに立ち、タクシーを止めた。タクシーに乗り込んで、一〇分ほども走っただろうか。方向も分からないままに、タクシーはどんどんと走り、繁華街を外れていくので、不安になり始めた頃に、タクシーは

ホテルに到着した。杭州梅園酒家。真新しいホテルだった。
カウンターでチェックインをする。一泊六〇元なのだが、保証金四〇元および住宿証の保証金一〇元、合計一一〇元（ＦＥＣ）を支払った。もちろんチェックアウト時に五〇元は戻ってくる。
若い男に紹介料、五〇元を支払い、なおも部屋までついてこようとするのを制止し、早く休みたいから、と言って、帰ってもらった。
部屋は風呂なしのツインルームだった。テレビをつけて、ゆっくりと煙草を吸った。カーテンを開けて外を眺めると、どうやらバスターミナルらしい。広場のようなところにたくさんのバスが駐車してあった。道路沿いは何もなくて寂しい所だった。一軒の商店だけがわずかに暗い道路に明かりを投げかけていた。
服務員の女性に地図を広げて見せ、
「ここは、どこですか」
と尋ねた。
彼女がボールペンで印をつけた場所には、長途汽車東站（長距離バス東ターミナル）と記されていた。やはり、バスターミナルなのだ。
「ここから紹興（シャオシン）へ行くバスは出ていますか」
「もちろんです」
流し場で、洗濯をし、それからヒゲを剃った。
明日は、ここからバスで紹興へ行こう。西湖の観光は、紹興から戻ってからにしよう、と僕は今後の方針を決めていた。
ホテルの部屋にロープをかけ、洗濯物を干してから、通りの商店で青島ビールを三・五元で買い、ぼんやりと中央電視台のテレビ番組を見ながら、身も心もくたびれた一日を反芻していた。

上海バンドでの経験に続いて、またもや最悪の経験だったけれども、それも喉元を過ぎて、ホテルの部屋でこうしてビールを飲んでいると、まんざらでもないと思えてくるのだった。何よりも中国のホテル事情を身を持って体験できたし、紹介料など余計なお金を使ってしまったけれども、バスターミナルのすぐ脇のホテルに泊まることができた。西湖観光はあとに延びたけれども、先に紹興へ行って、どうせまた杭州に戻ってくることになるのだから同じことだ。
最悪の経験はまた最深の経験にもなりうる。もしも何の意味もない怒りなどの感情にさまたげられることがないならば。感情は経験の底を形成する。ある場合にはもちろん感情は経験を豊かにするのだけれども、怒りなどのネガティブな感情は経験の底をつくり、経験を感情の水位に底上げし、経験が深まることを妨げる。僕はできうれば中国に対する悪感情

の上に中国旅行の経験を組み立てたくはなかった。
僕の旅行の方法はできるだけ自然体で流れに身をまかせていく、というものだ。こういう旅をしたいとか、旅とはこういうものだとかいう先入観をできるだけ取り除く。快速な旅をするために無理をしない。安上がりの旅をするためにも無理をしない。声をかけてくる人の誘いには乗る。どこでも、誰にも、オープンでありたい。
もちろんこういったことは方針などではない。それはむしろ僕の心性なのだ。要するにカモにされやすい日本人の心性そのものなのかもしれない。カモになっても、僕はいいと思う。西欧人のように、怒ったり、拒絶したりということは僕にはできない。経験を怒りに凝集するという代わりに、経験を読み変えて、いい方に解釈するというのは、怒りを拡散させ、経験をアイマイにする奴隷根性なのかもしれない、とも思う。しかし、僕はたとえ奴隷根性だとしても、あらかじめ確固とした自分というものによって旅をカッコに閉じたくはないのだ。
だが、僕は先走り過ぎている。経験をどのように経験するのかというのは旅のテーマであり、旅はまだ始まったばかりだ。

（注）中国のホテル事情
中国のホテルを大ざっぱにランク付けると、まずはホリデーインなどの外資系最高級ホテル、次に飯店、賓館などの外国人用ホテル、その次に招待所、旅社などの中国人用の旅館がある。
外国人は原則として中国人用のホテルには泊まれない。これは上からの通達なのであるから、いかんともし難い。また、ホテルのチェックインに際しては、パスポートや中国人であれば身分証や職場の工作証の提示を求められるので、あなたがたとえ中国人のような顔をし、中国語を話せたとしても、中国人用のホテルには泊まれない。
しかしながら、貧乏人の外国人としての我々が安く宿泊するいくつかの方法がある。ひとつは外国人用のホテルのドミトリーに泊まるということだ。だが、近年、観光収入を当て込んで、特に沿海地方はホテルの改築ラッシュが続き、改築されたホテルからは貧乏旅行者のためのドミトリーなどは消されていく傾向があるから、あまり当てにはならない。もうひとつは主として中国人用の飯店などで、外国人を泊めてくれるところがあるので、それ

を捜すということだ。旅行案内書にはこれらの情報が満載されているので、当ってみる価値はある。運が良ければ泊まれるだろうし、運が悪ければそっけなく断られて、高級ホテルを紹介されるだろう。最後に、街の招待所や旅社などで、まれに外国人を泊めてくれることがある。駅やバスターミナルで客引きをする人たちに声をかけてみる「日本人だけれどもＯＫか」と。案外すんなりと泊まれる場合がある。また時間があれば、これらの招待所や旅社を一軒ずつ当ってみるという手もある。これらの情況は流動的であり、上からの通達ですぐに変更になってしまうので、パック旅行を好まない人は、情況に応じて素早く適応することが必要である。

ともかく、中国のホテルというのは固い官僚主義がいかに融通のきかないものであるか、またある場合にはいかに恣意的であり、いいかげんなものであるかということを身をもって縫験するのには絶好の場である。